

正課体育スキー実習における学生による授業評価

本間 崇 千足耕一 布目靖則 南 隆尚

Student Evaluation in the Ski Intensive Course

Takashi HONMA, Kouichi CHIASHI, Yasunori NUNOME, Takahisa MINAMI

Abstract

The purpose of this study is to investigate expectation, satisfaction and evaluation of the participants in the five-day ski intensive course. The subjects are a total of 120 male and female students. To measure expectation and satisfaction, the questionnaire including 31 items is administered to the participants. To measure evaluation, the questionnaire including 35 items is administered.

The following results are obtained:

- 1) Students' expectations for ski intensive course are "improvement of skills" and "discovery a pleasure of skiing".
- 2) Factors of expectation for ski intensive course are about "communication", "fitness", "improvement of skills", "way of thinking about skiing" and "outdoor experiences".
- 3) Satisfaction of students show very high. And satisfactions are higher than expectations.
- 4) 84.1% of participants evaluate ski intensive course "very good".
- 5) Factor for evaluating the course are "atmosphere of the lesson", "program", "self evaluation", "acquiring basic skills", "manner" and "creativity".
- 6) Results of multiple regression analysis, comprehensive evaluation depends on "acquiring basic skills", "atmosphere of the lesson" and "self evaluation".

Key words: ski intensive course, student evaluation, expectation, satisfaction

はじめに

生涯学習、生涯スポーツの必要性が叫ばれている今日、スキーは冬季の運動不足を解消し自然や、多くの人々とのふれあいによる人間性の回復、自由で創造的な自己実現の可能性、体力や技能に応じた楽しみ方ができるなど、すべての人々に喜びと感動を与える、生涯学習にふさわしいライフスポーツとして国民の生活に定着してきている。

わが国におけるスキー人口は1770万人とも報告されているように多くの愛好者がいるス

キーは、大学体育においても冬季の教材のひとつとして、集中授業などでその講習が展開されている。

また、大学体育においては、そのカリキュラム編成に当たって、大学生のスポーツに対するニーズや意識を考慮に入れ、教育内容や教材の選択の幅を決定することが望まれている。このように多様性を持った教材を学生に提供していこうとするとき、学生の多様なニーズに関する情報が必要になる。すなわち供給側では、「受講する学生は何に期待し、

また何に満足するのであろうか」、「学生は授業をどのように評価するのであろうか」、「教官は、学生に対して何を留意し、どのようにカリキュラムを展開すべきか」などを知る必要がある。

ところで、大学教育の中では、その充実に向けての自己点検・自己評価に対する関心も高まってきており、実際に授業のフィードバック情報としての学生による授業評価が行われていることが報告されている。

スキー集中授業における学生による授業評価に関する研究では、中野ら(1992)⁴⁾、綿ら(1993)⁶⁾のものがある。中野らの研究では、独自に作成した1) 授業目標達成度、2) 実習生活状況、3) プログラム、4) 実習参加費等を内容としたアンケート調査を行い、全体結果及び男女差、技術レベル差での検討を行っている。しかし、授業評価とそれに関連する要因などについては言及していない。綿らの研究では、授業の目標・方法・成果・学生の受講態度、及び自由記述についてまとめ、授業の総合評価との関連について検討している。授業の総合評価(非常に良かった～非常に悪かった)において、「非常に良かった」と回答した者と、それ以外の回答をしたものの2群に分け、それに寄与する要因についての分析を林の数量化Ⅱ類を用いて行っている。しかし、説明要因の選定に問題が残されている点や、評価の際の要因がどのような因子で構成されているかという点については、検討されていない。また、授業に対する期待と満足については調査されていない。

そこで本研究では、筑波大学生のスキー実習に対する期待と満足及び授業評価に関する調査を実施し、授業の目的・方法・成果等を検討することにより授業のフィードバック情報を得ることを目的としている。

研究の方法

1) 調査対象

調査対象は、平成6年3月7日～11日に、新潟県湯沢町岩原スキー場で行われた筑波大学正課体育スキー集中授業に参加した、男子67名、女子53名の計120名である。

2) スキー実習の概要

スキー実習では、(1)スキーの基礎的技術と理論の習得、(2)より高度な技術を習得し、生涯スポーツに発展させる、(3)自然を理解する、(4)集団生活による相互の親睦、の4つを大きな目標としている。

スキー実習の日程は、現地4泊5日で表1のとおりである。スキー実習1ヶ月前に参加者に対するオリエンテーションを行い、自己申告によるスキー技術を把握し、班分けの材料とした。それによってスキー技術上級・中級・初級・初心者の4グループに分け、班分けを行った。各班の人数は9名前後で、15名の指導教官が講習を行った。

実習時間は、午前は9時から11時までの2時間、午後は14時から16時までの2時間である。その他講習以外の自由滑走は、午前講習終了後11:45までを滑走可とし、午後は実技終了から17:30までを許可した。なお昼食後、昼休みの自由滑走は禁止とした。

3) 調査方法

(1) 期待・満足調査

授業に対する期待調査は、前年度までのスキー実習の感想文、その他「期待」に対する研究^{1) 2)}を参考に作成した31項目(7段階評価)から成る調査用紙を用い、スキー実習1ヶ月前に行われたオリエンテーション時に配布・回収した。

満足度調査は、期待調査と同項目で31項目(7段階評価)からなる調査用紙を用い、実習最終日の閉講式直後に授業評価調査と同時

表1 実習中のスケジュール

時刻	1日目 3月7日(月)	2日目 3月8日(月)	3日目 3月9日(月)	4日目 3月10日(月)	5日目 3月11日(月)
7:00		起床	起床	起床	起床
7:45		朝食	朝食	朝食	朝食
9:00 11:00		実技	実技	実技	実技 閉講式
12:00	集合 開講式	昼食	昼食	昼食	昼食
14:00 16:00	実技	実技	実技	実技	解散
18:00	夕食	夕食	夕食	夕食	
19:00	班別ミーティング	講義	映画ビデオ	ナイター	
22:00	就寝	就寝	就寝	就寝	

に配布・回収した。

(2) 授業評価

授業評価の調査用紙は、綿らの研究⁶⁾を参考に作成した34項目（5段階評価）と自由記述からなるものを用いた。内容は、授業の目標に関する項目（10項目）、技術の習得に関する項目（5項目）、授業の方法に関する項目（8項目）、学生自身に関する項目（3項目）、その他（8項目）と自由記述（授業で良かった点・悪かった点・改善方法・その他）、及び授業の総合評価（5段階評価）が含まれている。この調査用紙を実習最終日の閉講式直後に配布・回収した。調査用紙は全て自記式質問形式である。

3) 統計処理

得られたデータは必要に応じて、単純集計、

クロス集計、t検定等を行った。なお、統計処理に際しては、パッケージプログラムSPSS/PC+及びSPSS/Macを用いた。因子分析にあたっては、主因子法により固有値1.00以上の基準に基づいて因子を抽出し、バリマックス法によって因子軸の回転を行った。

結果と考察

1) 期待の特徴 (表2)

スキーの集中授業に関する期待について調査するため、川村ら²⁾や平野ら¹⁾の研究及び昨年度までの感想文を参考に独自に作成した31項目からなる期待調査を行った。

期待度について「非常に期待している」から「全く期待していない」まで7点から1点を与え、平均値を算出した。その結果、期待度が高かった項目（平均値が6点以上）は、

表2 期待と満足についての結果(%)と平均値の比較

	期待 (N=120)										満足 (N=110)										t
	V1	V2	V3	V4	V5	V6	V7	N.A.	mean	S.D.	V1	V2	V3	V4	V5	V6	V7	N.A.	mean	S.D.	
1. スキーの基礎が学べる	69.2	18.3	5.0	3.3	0.0	0.0	0.8	3.3	6.54	.92	67.5	17.5	8.3	1.7	0.0	0.0	0.0	5.0	6.60	.69	7.2
2. 体力の増進	4.2	6.7	25.0	45.8	9.2	3.3	2.5	3.3	4.27	1.12	10.8	19.2	23.3	39.2	2.5	0.0	0.0	5.0	4.99	1.09	5.82
3. 雪国の生活を知る	2.5	4.2	8.3	45.0	16.7	11.7	16.7	3.3	3.41	1.48	5.0	6.7	12.5	50.8	10.0	5.8	4.2	5.0	4.08	1.30	4.19
4. 教習とのコミュニケーションがとれる	13.3	20.0	31.7	25.8	3.3	1.7	0.0	4.2	5.10	1.16	41.7	25.8	19.2	6.7	0.8	0.8	0.0	5.0	6.03	1.06	7.59
5. アフタースキーを楽しむ	2.5	12.5	22.5	35.0	9.2	5.0	9.2	4.2	4.08	1.46	10.0	16.7	18.3	39.2	3.3	6.1	1.7	5.0	4.64	1.38	3.42
6. スキー観がひろがる	25.0	22.5	28.3	19.2	1.7	0.0	0.0	3.3	5.50	1.13	50.0	21.7	16.7	5.0	0.8	0.0	0.0	5.8	6.22	.98	5.63
7. スピードやスリルを味わう	5.8	19.2	17.5	33.3	9.2	3.3	8.3	3.3	4.34	1.57	25.0	27.5	25.0	12.5	3.3	0.8	0.8	5.0	5.57	1.23	8.22
8. スキーに関する理論を学習する	24.2	24.2	29.2	12.5	3.3	1.7	0.8	4.2	5.48	1.29	45.0	29.2	15.8	5.8	0.0	0.0	0.0	5.0	6.22	.90	5.38
9. スキーのマネーについて学習する	23.3	27.5	25.8	17.5	0.8	0.0	0.0	5.0	5.30	1.08	23.3	27.5	25.8	17.5	0.8	0.0	0.0	5.0	5.59	1.07	2.42
10. 身体が丈夫になる	2.5	6.7	20.8	43.3	15.0	4.2	4.2	3.3	4.06	1.22	8.3	15.0	18.3	48.3	3.3	1.7	0.0	5.0	4.70	1.10	4.73
11. 規則正しい生活を身につける	1.7	4.2	15.8	45.8	16.7	3.3	9.2	3.3	3.76	1.29	30.8	21.7	19.2	20.0	0.0	1.7	1.7	5.0	5.54	1.37	12.22
12. 自己のスキーにおける欠点を知る	57.5	24.2	7.5	5.0	0.8	0.8	0.8	3.3	6.29	1.12	70.8	15.0	6.7	2.5	0.0	0.0	0.0	6.0	6.61	.74	2.89
13. 自然の美しさやきびしさを知る	4.2	20.0	23.3	35.0	8.3	1.7	4.2	3.3	4.56	1.33	27.5	20.8	25.0	18.3	2.5	0.0	0.8	5.0	5.53	1.24	6.72
14. 異性と知り合う事ができる	2.2	3.3	14.2	43.3	11.7	5.8	15.8	3.3	3.57	1.45	5.8	12.5	23.3	45.0	3.3	1.7	0.3	5.0	4.55	1.19	6.36
15. 運動能力が高まる	8.3	16.7	31.7	30.0	6.7	1.7	1.7	3.3	4.79	1.25	14.2	25.8	31.7	20.8	1.7	0.8	0.0	5.0	5.28	1.08	4.01
16. 新しい技術を学ぶ	59.2	25.8	7.5	4.2	0.0	0.0	0.0	3.3	6.44	.83	60.8	24.2	9.2	0.8	0.0	0.0	0.0	0.5	6.53	.70	1.07
17. 集団生活のルールについて学ぶ	1.7	8.3	18.3	50.0	10.0	5.0	3.3	3.3	4.12	1.15	13.3	14.2	33.3	30.8	2.5	0.0	0.8	5.0	5.01	1.13	7.47
18. 冒険心を満たしてくれる	9.2	10.8	18.3	39.2	8.3	3.3	7.5	3.3	4.32	1.56	22.5	24.2	17.6	25.0	4.2	0.8	0.8	5.0	5.32	1.33	6.64
19. スキーの楽しさを発見する	41.7	26.0	18.3	9.2	0.0	0.0	0.8	3.3	6.00	1.12	65.8	14.2	11.7	3.3	0.0	0.0	0.0	5.0	6.51	.82	4.91
20. 友情が高まる	15.8	27.5	30.8	19.0	1.7	0.0	1.7	3.3	5.30	1.21	44.2	20.8	20.8	8.3	0.8	0.0	0.0	5.0	6.03	1.06	5.84
21. 安全なスキーについて学習する	35.8	21.7	25.8	12.5	0.8	0.0	0.0	3.3	5.83	1.10	35.8	26.7	21.7	10.0	0.8	0.0	0.0	5.0	5.91	1.04	.66
22. 集中力がつく	6.7	7.5	25.8	43.3	8.3	1.7	2.5	4.2	4.44	1.22	17.5	22.5	22.5	30.8	0.8	0.8	0.0	5.0	5.23	1.17	5.48
23. 自己流のスキーを矯正する	50.0	25.8	10.0	7.5	0.8	0.0	2.5	3.3	6.10	1.32	53.3	20.0	10.0	10.0	0.8	0.0	0.8	5.0	6.16	1.17	.52
24. 友人とのコミュニケーションがとれる	15.0	30.0	30.0	17.5	1.7	0.8	1.7	3.3	5.33	1.22	44.2	25.0	19.2	5.8	0.8	0.0	0.0	5.0	6.10	.99	6.79
25. 健康になれる	4.2	8.3	22.5	48.3	5.0	4.2	2.5	5.0	4.33	1.18	15.8	15.8	26.7	33.3	1.7	0.8	0.8	5.0	5.07	1.23	5.91
26. 新しい経験を積む	36.7	29.2	19.2	10.8	0.8	0.0	0.0	3.3	5.95	1.03	54.2	25.0	13.3	1.7	0.8	0.0	0.0	5.0	6.39	.84	3.53
27. 非日常的な体験ができる	16.7	20.0	18.3	32.5	5.8	2.5	0.8	3.3	4.99	1.37	37.5	22.5	19.2	12.5	2.5	0.8	0.0	5.0	5.82	1.21	7.48
28. 自分についての理解を深めることができる	7.5	10.0	27.5	45.8	2.5	2.5	0.0	4.2	4.67	1.07	26.7	21.7	20.8	22.5	2.5	0.8	0.0	5.0	5.48	1.23	6.10
29. 交友関係が広がる	18.3	28.3	32.5	13.3	2.5	0.0	1.7	3.3	5.41	1.21	50.8	20.0	19.2	5.0	0.0	0.0	0.0	5.0	6.23	.95	7.07
30. スキー技術が上達する	70.8	17.5	7.5	0.0	0.0	0.0	0.8	4.4	6.61	.82	65.0	17.5	11.7	0.8	0.0	0.0	0.0	5.0	6.54	.73	.85
31. 他人と協力する事を知る	7.5	14.2	28.3	40.0	3.3	0.8	1.7	4.2	4.73	1.16	32.5	22.5	25.8	13.3	0.8	0.0	0.0	5.0	5.75	1.10	8.68

***p<.001 **p<.01

V1: 非常に期待(満足)している(7点) ... V4: どちらでもない ... V7: 全く期待(満足)していない(1点)

「スキー技術が上達する」(Mean=6.61, SD=.82), 「スキーの基礎が学べる」(Mean=6.54, SD=.92), 「新しい技術を学ぶ」(Mean=6.44, SD=.83), 「自己のスキーにおける欠点を知る」(Mean=6.29, SD=1.12), 「スキーの楽しさを発見する」(Mean=6.00, SD=1.12) などであった。これらから、学生は「スキー技術を学習すること」や「スキーを行う楽しさを発見すること」に期待をしているものと考えることが出来る。

一方、全体の中では期待度が比較的低かった項目は、「雪国の生活を知る」(Mean=3.41, SD=1.48), 「異性と知り合うことが出来る」(Mean=3.57, SD=1.45), 「規則

正しい生活を身につけることができる」(Mean=3.76, SD=1.29) の3項目であった。

2) 期待の因子分析 (表3)

学生がスキーの授業を受講するにあたって、どのような期待を持っているのかを明らかにするために、因子分析を行った。固有値1.0以上で5因子が抽出され、累積寄与率は53.0%であった。因子負荷量0.5以上の項目を負荷量の高い順に取り出し、各因子の解釈を行った。

第1因子には「友人とのコミュニケーションがとれる」「交友関係が広がる」「友情が深

表3 期待の因子分析結果 (バリマックス回転後)

項目	F1	F2	F3	F4	F5
24. 友人とのコミュニケーションがとれる	.773				
29. 交友関係がひろがる	.767				
20. 友情が深まる	.746				
4. 教官とのコミュニケーションがとれる	.636				
31. 他人と協力することを知る	.595				
5. アフタースキーを楽しむ	.556				
10. 身体が丈夫になる		.823			
2. 体力の増進		.703			
11. 規則正しい生活を身につける		.589			
25. 健康になる		.580			
12. 自己のスキーにおける欠点を知る			.758		
23. 自己流のスキーを矯正する			.753		
16. 新しい技術を学ぶ			.732		
30. スキーの技術が上達する			.713		
9. スキーのマナーについて学習する				.775	
21. 安全なスキーについて学習する				.683	
8. スキーに関する理論を学習する				.625	
6. スキー観がひろがる				.559	
27. 非日常的な体験ができる					.575
13. 自然の美しさやきびしさを知る					.564
18. 冒険心を満たしてくれる					.540
固有値	8.93	3.13	1.80	1.55	1.02
寄与値 (%)	28.8	10.1	5.8	5.0	3.3

まる」などの6項目が高い負荷を示しており、他人とのコミュニケーションに関する内容を含むものである。よって第1因子を「コミュニケーション」に関する因子と解釈した。

第2因子には「身体が丈夫になる」「体力の増進」などの4項目が高い負荷を示しており、身体や体力に関する内容を含むものである。よって第2因子を「フィットネス」に関する因子と解釈した。

第3因子には「自己のスキーにおける欠点を知る」「自己流のスキーを矯正する」などの4項目が高い負荷を示した。これらはスキーの技術に関する内容を含むものである。よって、第3因子は「技術開発」に関する因子と解釈できる。

第4因子には「スキーのマナーについて学習する」「安全なスキーについて学習する」など4項目が高い負荷を示した。これらは、スキーに対するマナーや考え方に関連していると考えられる。よって第4因子は「スキーについての考え方」に関する因子と解釈できる。

第5因子には「非日常的な体験ができる」「自然の美しさやきびしさを知る」などの3項目が高い負荷を示した。これらは自然や非日常・自然・冒険といったものを含むものである。よって、第5因子は「野外での体験」に関する因子と理解することができる。

以上、期待に関する調査の因子分析を行った結果、「コミュニケーション」に関する因子、「フィットネス」に関する因子、「技術開発」に関する因子、「スキーについての考え方」に関する因子、「野外での体験」に関する因子の5因子が抽出された。

この因子別にみた期待では、「技術開発」が最も高く、次いで「スキーについての考え方」「コミュニケーション」に関する因子が高いという結果であった。

3) 満足の特徴 (表2)

スキー実習に参加した学生の満足について調査するため、期待調査と同じ項目を用いて満足調査を行った。満足度の高かった項目(平均値が6点以上)は、「自己のスキーにおける欠点を知る」、「スキーの基礎が学べる」、「スキー技術が上達する」、「新しい技術を学ぶ」、「スキーの楽しさを発見する」、「新しい経験を積む」、「スキー観が広がる」、「スキーに関する理論を学習する」、「自己流のスキーを矯正する」、「友人とのコミュニケーションがとれる」、「教官とのコミュニケーションがとれる」であった。

そして満足度が極めて低いという項目はなく、全項目において満足傾向が高いという結果が得られた。しかし、調査の実施時期は実習終了後すぐであり、一般的に受講者の高揚感があらわれやすく、通常よりも高い値を示していることを考慮しなければならない。

4) 期待と満足の比較 (表2・表4)

スキー実習に関する期待と満足を比較するために、平均値、標準偏差を算出し、差をみるためにt検定を行った。その結果、殆どの項目において期待よりも満足の方が有意に高かった。有意差がみられなかった項目は「新しい技術を学ぶ」、「安全なスキーについて学習する」、「自己流のスキーを矯正する」、「スキー技術が上達する」の5項目であった。これらの項目については、期待度が非常に高かったため、期待と満足の間に差があらわれなかったと考えることができる。

同様に因子別の比較を行ったところ、全ての因子において期待よりも満足の方が高い値を示した。「技術開発」に関する因子においては有意差がみられなかったが、その他の因子においては有意差が見られた。特に「野外での体験」に関する因子、「コミュニケーション」に関する因子、「フィットネス」に関する因子では期待と満足の差が顕著であった

表4 因子別にみた期待と満足の比較

	期待		満足		t
	Mean	S.D.	Mean	S.D.	
「コミュニケーション」に関する因子	29.92	5.80	34.81	5.02	9.48 ***
「フィットネス」に関する因子	16.43	3.91	20.33	3.78	9.69 ***
「技術開発」に関する因子	25.45	3.39	25.86	2.52	1.35
「スキーについての考え方」に関する因子	22.10	3.65	23.91	3.08	4.88 ***
「野外での体験」に関する因子	13.88	3.33	16.69	2.72	10.04 ***

***p<.001

このことは、野外での直接的な体験を通じることによってより大きな満足感が得られることを示唆しているものと考えられる。また、集団宿泊や共有体験によってコミュニケーションが一層深まるものと考えられる。そして、集中実技は自らの「身体」というものについて、気づく機会を与えるのではないかと推察される。

一方、「技術開発」に関する因子に属する因子では有意な差があらわれなかったが、期待が非常に高かったためであろうと考えられる。すなわち、「技術開発」に関する因子でも高レベルの期待と同程度の満足感を感じているといえよう。

5) 授業評価の結果(表5)

授業の評価に関する調査を行ったところ113名から有効回答が得られた。評価に関する34項目について非常にあてはまる(5点)から全くあてはまらない(1点)を与え、平均点、標準偏差を算出した。

授業の目標については、スキー実習の4つの大きな目標のうち「自然を理解する」という目標においては達成率が58.4%とやや低い傾向を示したが、その他の目標(項目では1から10まで)においては約70%から90%の達成率を示しており、概ね目標は達成できていると考えられる。

また、授業の総合評価においても表6の通り、「非常に良かった」が84.1%を占め、「まあよかった」が11.5%、回答なしが4.4%であり、普通・少し悪かった・非常に悪かった

と回答した者はいなかった。綿ら⁶⁾の研究結果においても総合評価の5段階評定(5点満点)において平均値は4.48であったと報告されている。本研究でも先行研究と同様に非常に良かった(5点)から非常に悪かった(1点)を与えたところ平均値が4.88であったことから、本スキー実習の評価は非常に高かったといえる。

34項目中において「非常にあてはまる」及び「かなりあてはまる」という回答が多かった項目は、「この授業で真剣に学ぼうと努力した」、「授業期間を通じて常に出席しよう」と心がけた、「この授業を他の学生に薦めたい」の3項目における99.1%をはじめ、「大学の授業としてふさわしい」(96.5%)、「教師は十分な知識を持っていた」(95.4%)、「友人や教師とのコミュニケーションについて理解できた」(93.9%)、「スキーの基礎的な技術が習得できた」(93.8%)、「期待していたものが満足された」(93.8%)、「教師とのコミュニケーションは十分であった」(93.0%)、「自己の能力水準が理解できた」(91.2%)であった。逆に、「非常にあてはまる」及び「かなりあてはまる」と答えた者の割合が全体結果の中では低く、改善を要すると考えられる項目は、「テキストは良かった」(45.1%)、「自然環境を認識することができた」(58.4%)、「オリエンテーションは良かった」(58.4%)、「スキーの応用技術(パラレルターン・ステップターン・ウェーデルン)が習得できた」(59.3%)などである。このうち「応用技術の習得」ということを改善するには、

表5 授業評価の結果

項 目	N=113						V1+2	Mean	(S.D.)
	V1	V2	V3	V4	V5	N.A.(%)			
1. skiの基礎的な技術が習得できた	59.3	34.5	5.3	0.9	0.0	0.0	93.8	4.52	(.64)
2. ゲレンデでのルール、エチケット、マナーが理解できた	28.3	44.2	25.7	0.9	0.9	0.0	72.5	3.98	(.81)
3. skiの理論が理解できた	38.9	48.7	9.7	1.8	0.9	0.0	87.6	4.23	(.77)
4. 自然環境を認識することができた	25.7	32.7	29.2	10.6	1.8	0.0	58.4	3.69	(1.03)
5. 危険性の認識と自己の安全の確保について理解できた	25.7	48.7	18.6	6.2	0.9	0.0	74.4	3.92	(.88)
6. 友人や教師とのコミュニケーションについて理解できた	55.8	38.1	6.2	0.0	0.0	0.0	93.9	4.49	(.61)
7. 集団生活のルール、エチケット、マナーについて理解できた	33.6	37.2	27.4	0.9	0.9	0.0	71.0	4.02	(.86)
8. より高度な技術が獲得できた	46.0	41.6	8.0	4.4	0.0	0.0	87.6	4.29	(.80)
9. 生涯スポーツとしてのスキーを認識することができた	51.3	34.5	12.4	1.8	0.0	0.0	85.8	4.35	(.77)
10. 自己の能力水準が理解できた	55.8	35.4	6.2	1.8	0.9	0.0	91.2	4.43	(.77)
11. スキーの基本操作(歩行・登行)が習得できた	72.6	8.8	8.8	5.3	3.5	0.9	81.4	4.49	(1.17)
12. skiの基礎技術(停止・ブルボーン・ジャンプ・システム)が習得できた	56.6	26.5	12.4	0.9	2.7	0.9	83.1	4.39	(1.02)
13. skiの応用技術(パラレルターン・ステップターン・ウェーブ)が習得できた	19.5	39.8	20.4	10.6	8.8	0.9	59.3	3.56	(1.29)
14. 運動量は十分に確保されていた	46.9	30.1	14.2	8.0	0.9	0.0	77.0	4.14	(1.00)
15. 理論と実技を関連づけて学習できた	44.2	38.9	12.4	4.4	0.0	0.0	83.1	4.23	(.84)
16. オリエンテーションは良かった	22.1	36.3	36.3	3.5	0.0	1.8	58.4	3.88	(1.08)
17. 班分けの方法は適切であった	30.1	31.0	21.2	14.2	3.5	0.0	61.1	3.70	(1.15)
18. 夜の講義は良かった	28.3	31.9	27.4	8.0	4.4	0.0	60.2	3.72	(1.10)
19. 班別ミーティングは良かった	60.2	28.3	9.7	1.8	0.0	0.0	88.5	4.47	(.75)
20. VTRを活用することは良かった	68.1	18.6	10.6	1.8	0.9	0.0	86.7	4.51	(.83)
21. クロスカントリースキーは良かった	28.3	22.1	21.2	1.8	8.8	17.7	50.4	4.66	(2.33)
22. 授業の時間配分は適切であった	44.2	37.2	10.6	7.1	0.9	0.0	81.4	4.17	(.94)
23. テキストは良かった	18.6	26.5	40.7	7.1	6.2	0.9	45.1	3.50	(1.19)
24. 授業は創造性に富むものであった	39.8	45.1	11.5	2.7	0.9	0.0	84.9	4.20	(.82)
25. 教師は十分な知識を持っていた	84.8	10.6	3.5	0.0	0.0	0.0	95.4	4.82	(.47)
26. 教師は十分準備し熱意を持っていた	85.0	13.3	1.8	0.0	0.0	0.0	88.3	4.83	(.42)
27. 学生間のコミュニケーションは十分であった	61.9	26.5	8.8	1.8	0.0	0.9	88.4	4.54	(.85)
28. 授業において理解を助けるための補助手段は適切に用いられている (資料・VTR・フリー練習・テスト・レポートなど)	50.4	33.6	13.3	2.7	0.0	0.0	84.0	4.32	(.81)
29. 教師とのコミュニケーションは十分であった	67.3	25.7	7.1	0.0	0.0	0.0	93.0	4.60	(.62)
30. この授業から自分の期待していたものが満足された	65.5	28.3	4.4	1.8	0.0	0.0	93.8	4.58	(.67)
31. 集中授業「スキー」は大学の授業としてふさわしい	84.1	12.4	2.7	0.9	0.0	0.0	96.5	4.80	(.52)
32. 私は、この授業で真剣に学ぼうと努力した	87.6	11.5	0.9	0.0	0.0	0.0	99.1	4.87	(.37)
33. 私は、この授業期間を通じて常に出席しようとした心がけた	93.8	5.3	0.9	0.0	0.0	0.0	99.1	4.93	(.29)
34. 私は、この授業を他の学生に薦めたい	88.5	10.6	0.9	0.0	0.0	0.0	99.1	4.88	(.36)

V1:非常にあてはまる(5点) V2:かなりあてはまる V3:どちらでもない V4:あまりあてはまらない V5:全くあてはまらない(1点)

表6 授業の総合評価

項 目	N	(%)
非常に良かった	95	84.1
まあ良かった	13	11.5
普通	0	0.0
少し悪かった	0	0.0
非常に悪かった	0	0.0
N.A.	5	4.4

受講者の技能レベルによって不可能である場合もあるため、やむを得ないと考えられるが、その他の「テキスト」「自然環境」「オリエンテーション」については改善する余地が含まれるものと考えられる。特に「自然環境の認

識」という点については、スキー実習の大きな目標のうちのひとつであるにもかかわらず評価が低いことから、目標を達成するためのプログラムの開発・考案が必要であろう。これに関連して、現代のゲレンデを中心としたアルペンスキーでは、寒さや、気象の変化、温度差によるバーン状況の変化などについては経験できる可能性があるが、本当の「自然環境」を認識することが困難になっていることも原因と考えられる。テキストについては更なる活用方法の開発を考えることも必要であろう。

6) 授業評価の因子分析 (表7)

学生が授業をどのような要因で評価するかを明らかにするために、授業評価に関する項目34項目について因子分析を行った。その結果6因子が抽出され、累積寄与率は50.9%であった。因子負荷量0.5以上の項目を負荷量の高い順に取り出し、各因子の解釈を試みる。

第1因子で高い負荷を示した項目は、「学生間のコミュニケーションは十分であった」「教師とのコミュニケーションは十分であった」などの6項目であった。これらは、教師の準備・熱意・親しみやすさや、仲間とのコ

ミュニケーションといった内容を含むものと考えられる。そこで第1因子を「授業の雰囲気」に関する因子と解釈した。

第2因子で高い負荷を示した項目は「班分けの方法は適切であった」「夜の講義は良かった」など、授業展開に関する手順、プログラムに関する内容を含むものと解釈できる。そこで第2因子を「プログラム」に関する因子と解釈した。

第3因子では、「私は、この授業期間を通じて常に出席しようと努力した」などの3項目が高い負荷であった。これらは、学生自身の授業に対する自己の態度や自己評価といっ

表7 評価の因子分析結果 (バリマックス回転後)

項目	F1	F2	F3	F4	F5	F6
27. 学生間のコミュニケーションは十分であった	.875					
29. 教師とのコミュニケーションは十分であった	.761					
28. 授業において理解を助けるための補助手段は適切に用いられていた	.663					
26. 教師は十分に準備し熱意を持っていた	.646					
19. 班別ミーティングは良かった	.585					
6. 友人や教師とのコミュニケーションについて理解できた	.512					
17. 班分けの方法は適切であった		.689				
18. 夜の講義は良かった		.680				
23. テキストは良かった		.596				
22. 授業の時間配分は適切であった		.589				
21. クロスカントリースキーは良かった		.538				
16. オリエンテーションは良かった		.517				
33. 私は、この授業期間を通じて常に出席しようと努力した			.843			
34. 私は、この授業を他の学生に薦めたい			.658			
32. 私は、この授業で真剣に学ぼうと努力した			.649			
12. スキーの基礎技術が習得できた				.833		
11. スキーの基本操作が習得できた				.776		
7. 集団生活のルール、エチケット、マナーについて理解できた					.805	
2. ゲレンデでのルール、エチケット、マナーが理解できた					.614	
5. 危険性の認識と自己の安全の確保について理解できた					.568	
13. スキーの応用技術が習得できた						.652
10. 自己の能力水準が理解できた						.590
24. 授業は創造性に富むものであった						.524
固有値	8.81	2.62	2.28	1.39	1.19	1.01
寄与率(%)	25.90	7.70	6.70	4.10	3.50	3.00

た内容を含むものである。そこで第3因子を「自己評価」に関する因子と解釈した。

第4因子では、「スキーの基礎技術が習得できた」など2項目が高い負荷を示した。これらは、スキー技術・操作に関する内容を含むものである。そこで第4因子を「基礎技術の習得」に関する因子と解釈した。

第5因子では「集団生活のルール、エチケット、マナーについて理解できた」などの3項目が高い負荷を示した。これらは、マナーに関する内容を含むものと考えられる。そこで第5因子を「マナー」に関する因子と解釈した。

第6因子では「スキーの応用技術が習得できた」などの3項目が高い負荷を示した。これらは、能力・応用・創造などに関する内容を含むものである。そこで、第6因子を「応用・創造」に関する因子と解釈した。

授業評価における各因子の得点を算出すると表8のようになった。1項目あたりの得点で比較すると「自己評価」に関する因子が最も得点が高く、次いで「授業の雰囲気」に関する因子、「基礎技術の習得」に関する因子が高いという結果であった。

7) 総合評価に寄与する要因 (表9)

ここでは、スキー集中授業における総合評価が、どのような要因に依存しているかを明らかにする。授業評価における各因子のうち、どの因子が総合評価に貢献しているかを検討するために、総合評価を目的変数としてステップワイズ方式の回帰分析を行った。その結果、偏回帰係数が有意であった変数は、選出順に「基礎技術の習得」に関する因子、「授業の雰囲気」に関する因子、「自己評価」に関する因子であった。

したがって、スキー集中授業における総合評価は基礎技術の習得と授業の雰囲気に関する因子及び自己評価に関する因子に大きく依存しているということが出来る。したがって、

表8 授業評価の因子得点

因子	Mean	S.D.	1項目あたり得点	N
授業の雰囲気 (6項目)	27.26	2.95	4.54	113
プログラム (6項目)	23.61	4.99	3.94	113
自己評価 (3項目)	14.67	.86	4.89	113
基礎技術の習得 (2項目)	8.86	2.04	4.43	113
マナー (3項目)	11.92	2.14	3.97	113
応用・創造 (3項目)	12.19	2.07	4.06	113

表9 重回帰分析の結果

ステップ	予測変数	R ²	回帰係数	F比
1	基礎技術の習得	.177	.42	18.24***
2	授業の雰囲気	.281	.54	16.98***
3	自己評価	.321	.57	13.06***

*** p < .001

これらの因子は、総合評価の予測変数として有効であるということが出来る。つまり、「基礎技術の習得」、「授業の雰囲気」及び「自己評価」について高い評価を得るような授業展開が最も学生の授業に対する総合評価を高めるものと考えられる。

綿ら⁶⁾の研究では、総合評価を大満足群とそれ以外の群の2群に分け、数量化II類を用いて判別分析を行っている。その結果「コミュニケーション対教師」「教師の熱意」「他に薦めたい」「技能の上達」「触発された」の順で満足度への説明要因として高いと報告している。本研究でもこのうちの教師とのコミュニケーションや教師の熱意、技能の上達、他に薦めたいといった点で同様の結果が得られた。

8) 授業評価における自由記述のまとめ

数値化できないところや既に設定してある項目以外での学生の率直な意見を聞き出すために、自由記述欄を設けた。ここでは、授業の良かった点、悪かった点、改善するための方法、その他についての記述を求めた。

良かった点では、「技術・技能の向上ができた」をはじめ「スキーが基礎から学べた」、「講師が良かった」、「講習の内容が良かった」、「ミニスキー・クロカン・ポールなどいろいろな体験ができた」、「学生間及び学生・

講師間のコミュニケーションがとれた」「自分の滑りを客観的にみることができた」ことなどが多くあげられていた。一方、良くなかった点では、プログラム・日程に関する事、他の班との交流が少なかったこと、自由滑走時間に関する事、食事に関する事、生活指導に関する事、班分けや部屋分けに関する事等についての意見があげられた。これらの意見をフィードバックしさらによりよい実習を目指す努力が重要であると考えられる。具体的にはナイタースキーの日程の検討・早朝スキー実施の検討や用具の手入れについての講義・実習の開催及び、全体での交流や他班との交流などが望まれる。

まとめ

本研究では、スキー実習参加者のスキー実習に対する期待と満足及び授業評価に関する調査を実施した。調査対象は、実習に参加した男子67名、女子53名の合計120名である。その結果以下のことが明らかとなった。

- 1) 学生のスキー実習に対する期待では「スキー技術の向上」や「スキーの楽しさを発見すること」が最も大きい。
- 2) 期待の因子として「コミュニケーション」に関する因子、「フィットネス」に関する因子、「技術開発」に関する因子、「スキーについての考え方」に関する因子、「野外での体験」に関する因子の5因子が解釈された。
- 3) 満足度は全般的に非常に高かった。また、期待度よりも満足度の方が高いという結果が得られた。
- 4) 授業評価では「非常に良かった」と回答したものが84.1%を占め、高い割合を示した。
- 5) 授業評価の因子では「授業の雰囲気」に関する因子、「プログラム」に関する因子、「自己評価」に関する因子、「基礎技術の習得」に関する因子、「マナー」に関する

因子、「応用・創造」に関する因子の6因子が解釈された。

- 6) 授業の総合評価に寄与する要因として「基礎技術の習得」に関する因子、「授業の雰囲気」に関する因子及び「自己評価」に関する因子が貢献していることが明らかになった。

今後の課題

今後の課題として、個人の属性（性差やこれまでのスキー経験差など）による、期待・満足の評価や分析を行い、その属性に応じた効果的な指導やプログラムの立案についても考察を行う必要がある。また、授業評価の自由記述にあらわれた要因や項目についても授業評価の調査票に組み入れていく必要があると考えられる。

加えて、本調査における満足調査及び授業評価調査は、実習直後に行っているが、一般的に実習直後には高揚感があらわれやすく、落ちついてからの評価と差が生じる場合が考えられる。調査を行う適正な時期についても再考すべきであろう。

今回の調査では、需要サイドである学生に対して調査を行い、その特徴について考察したが、今後は供給サイドの自己評価や双方の比較についても行っていく必要がある。

参考文献

- 1) 平野吉直・飯田稔, 学校スキーに対する親の期待—参加児童に及ぼす効果について—, 筑波大学体育科学系運動学研究, 第1巻, pp.1—8, 1984.
- 2) 川村協平・山田英美, キャンプに対する親の期待(第1報)—幼児の父・母及びキャンプ参加の有無による比較—, 山梨大学教育学部研究報告, 第35号, pp.177—182, 1984.
- 3) 舛本直文・綿祐二, 大学体育における学生評価「保健体育講義」と「体育実技コー

- ス：マリン」の経年変化を中心に，東京都立大学体育学研究，第18号，pp61-67，1993.
- 4) 中野友博・飯田稔・井村仁・宍戸和行・福島邦男，学生による授業評価の試みー筑波大学体育専門学群野外運動理論・実習（雪上）を事例としてー，日本体育学会第43回大会号B，pp.768，1992.
- 5) 筑波大学教育計画室，筑波大学の大学設置基準大綱化に伴う新カリキュラムへの移行状況と教育の自己点検・評価体制の整備，1993.
- 6) 綿祐二・舛本直文，「体育実技Bコース：スキー」における学生による授業評価，東京都立大学体育学研究，第18号，pp.53-59，1993.
- 7) 余暇開発センター，レジャー白書'94，1994.
- 8) 全日本スキー連盟，日本スキー指導教本，スキージャーナル社，1994.